

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 香春

論 文 題 目

メタファーに関する哲学的・認知言語学的考察

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	宮原 勇
委員	名古屋大学教授	田村 均
委員	名古屋大学教授	金山 弥平
委員	名古屋大学教授	佐久間 淳一

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の概要】

本論文はアリストテレス以来、欧米哲学において問題となってきたメタファーの問題を、特に我々の認識プロセスの問題として哲学的、認知言語学的に解明しようとしたものである。

第一章「アリストテレスのメタファーの定義」では、従来の解釈では<広義>のメタファー表現を四つに分類していたのに対し、筆者はさらに独自に「類比関係による機能否定式修飾方法」を付け加え、直喩と(狭義の)メタファーとの相違を明確にした。

第二章「リチャーズの新修辞学原論」では、I.A.リチャーズのメタファー論について、彼独自の「文脈原理」を明確にし、その上で、「主意」と「媒介」という対概念からなるメタファー概念を分析し、結局、<メタファーとは言語表現全体に遍在する一般の原理である>という洞察にたどり着いていることを示した。

第三章「ブラックの相互作用説」では、メタファー的意味で使用されている表現と文字通りの意味で使用されている表現の「相互性」に関し、批判的検討がなされるとともに、ブラックの相互作用説がリチャーズの文脈理論にいかにか依存しているかが明らかにされた。

第四章「サールの語用論説」においては、哲学者 J.サールのメタファー論では、メタファー的意味は「話し手の発話意味」として捉えられており、「文や語の意味」に還元しえない意味内容を含意するとされる。そこから、メタファーとしての言明は、何らかの類似性についての言明ではないという論点が導き出された。

第五章「レイコフとジョンソンによる概念メタファー」では、レイコフ/ジョンソンの概念メタファー理論の哲学的意味を考察し、われわれの概念体系にはメタファー的概念があるからこそ、通常の文彩としてのメタファー表現も可能となり、理解もされうることを指摘し、筆者の母語であるモンゴル語や中国語、さらには日本語や英語での<時間>表現における概念メタファーの比較を行い、それぞれの言語の特徴を摘出している。

第六章「マーク・ジョンソンの「イメージ図式」によるメタファー論」では、メタファー表現の基盤となる身体性に関して、身体性の契機が「経験のゲシュタルト」として機能していることを、認知心理学の創始者ナイサーやゲントナーらの研究を援用して論じている。それによると、メタファー的投射は、身体的経験に基礎を置く動的パターンがイメージ図式化することによって成立するとした。

第七章「フォコニエのメンタル・スペース理論」では、メタファーという言語表現の根底には、<二つの異なる概念領域の間の投射マッピングによる認知プロセス>があるという説が検討された。つまり、「ソース」と「ターゲット」、「総称」、「融合」の四つのスペースからなる動的構造である。筆者は、そのような抽象性が高く、難解な理論を駆使して、具体的にいくつかのメタファー表現を分析して見せている。

## 論文審査の結果の要旨

第八章「アナロジーと類似性について」では、アナロジーと類似性の概念がメタファーという認知プロセスとどのように関わるかについて論じている。筆者の見解では、「類似性」とは、対象の属性間の比較の問題であり、カテゴリー化の問題であるのに対して、「類比関係」とは、構造マッピングの問題であり、これら二つの概念がメタファー論に於いて混同されてきたという。結局、メタファーとは、複数の経験領域間に跨がるマッピング、あるいは認知的「移動」であり、そのような認知の運動が、われわれの思考過程を支配しているといえと結論づけている。

### 【本論文の評価】

本論文の主要な特徴は、レイコフやターナーらの認知言語学における「概念メタファー」の理論を検討し、フォコニエのメンタル・スペース理論を駆使してメタファー表現を解明している点にある。筆者は、そのような認知言語学でのメタファー論の見解に関しては、「経験」や「身体性」、「図式」といった使用概念の厳密性を哲学の立場から批判的に検証しつつも、基本的な見解としては賛成の立場を取る。

また、本論文の意義として、議論の端緒としてアリストテレスのメタファー論を筆者独自の概念を使用して分析し、全体の議論の筋道を明確にしている点が指摘できる。アリストテレスの二つの著作『詩学』と『修辞学』でのメタファーに関する説明の違いにも注目し、その理由を解明した点にも意義がある。また、しばしば引き合いに出されるが、その難解さ故に本格的に議論されることの少なかった I.A.リチャーズのメタファー論を詳しく検討し、彼の「文脈」概念の二重性を指摘した上で、次の世代のブラックの相互作用説やサールの語用論説を先取りするものとして位置づけたことは、評価できる。また、認知言語学者レイコフの<概念メタファー>論やフォコニエのメンタル・スペース理論の詳細な分析は、筆者独自の事例を挙げて丁寧に行われており、評価できる。基本的には、現在に於いてメタファーを論ずる上で不可欠な理論をほぼ網羅したと言えるが、それぞれの理論に関しては、かなりの頁を割いて検討しており、全体として「力作」となっている。メタファー研究は具体的に事例を提示せざるを得ないという事情もあり、具体的事例や経験の提示において、場合によっては改善の余地があるものも見られた。また、時間表現にみられるメタファーなどの各言語の比較研究に関しては、メタファー表現を手がかりとした比較文化研究として新たな研究課題となりうるものであり、その意味では、今後の展開が期待できるテーマであるといえる。以上のように今後の研究の展開に期待したい要素も見られるが、しかしそれらは本論文の価値を損なうものではなく、最終章で論じられた「類似性」と「類比関係」をめぐる形而上学的議論のように、全体として、考察のレベルが抽象度の高い段階にまで到達しており、高く評価できる。よって、審査委員一同、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判断した。